

『 クリエーターの話 ～ 私のイメージの源泉 』

スペースデザイン部会員 伊藤 順

「初めての新作」

<はじめに>

私が新制作展を初めて知ったのは、大学3年生の頃です。現SD部会員である西村俊夫先生の工芸研究室に所属していた私は、西村先生の作る不思議で巨大な作品に驚き、その作品が新制作展に出品するものであることを知りました。それまで、美術団体や公募展といったものに疎かった私は、とても関心を持った記憶があります。そしていつか、自分も応募してみたい、と思いました。

実際に新制作展に応募したのは、社会人になってからでした。当時は山形県で公立中学校の美術教諭として働いており、日々激務に追われ、大学卒業から3年ほどは制作から遠ざかっていたのですが、いつか新作に出品したいという思いはずっとあったので、自らを奮い立たせて制作を始めました。

制作場所は、勤務先の中学校です。美術の他に技術も担当していた私は、校長の許可を得て木工室で制作することにしました。しかし、木工室とはいえ中学校ですので、工作機械などはほとんどありません。木工室の隣にある1畳ほどの倉庫を作業部屋として借りて制作を開始しました。

<作品のアイデアについて>

作品制作をしていなかった間も作品のアイデアはずっと考えていて、作りたいものは決まっていました。細くて短い角材を木口面で揃えて並べ、上下に規則的に少しずつずらして配置、接着することで水紋を表現するというアイデアです。曲線的なフォルムの美しさ、木という素材の持つあたたかさ、自然の中に見られる造形的美しさなどをテーマにしたものであり、現在まで続く私のものづくりの原点となるアイデアと言えます。大学の卒業制作以来ほとんど立体作品を作っておらず、経験不足な当時の自分の中では、これまで見たこともないすごい立体作品ができるぞ、と思い意気込んでいました。もちろんこれが錯覚であったことは言うまでもありませんが、それはまた後ほど説明します。

<材料となる木材について>

私は木が好きで、作品の素材は今も木が主です。当時考えていた作品の素材も木で、アイデアを実現するためには木の角材をたくさん用意する必要がありました。10mm×10mm×100mmの角材をひとつのピースとして計算してみると、1m³作るのに必要なピースは10,000本!これを材木屋などで買うことにすれば相当な金額になります。何とかならないかと思った結果、当時受け持っていた技術の授業でアガチス材を使って本立てを作る授業を行っていて、生徒が余らせた大量の端材があり、これを使えば節約になると考えました。製材から自分で行った方がより良いような気もしていました。しかし、厚みが10mmなのはいいのですが、大きさはまちまちの端材です。先述の通り、工作機械はほとんどない木工室の狭い倉庫で、ハンディタイプの丸のこを台に固定してひたすら製材しました。仕事が終わって夕方から作業を始め、時には深夜までもくもくと木を切断しました。

<作品の完成>

制作を始めたのが遅かったことと、製材に思いのほか時間がかかったことにより、搬入 日ぎりまで制作を行いました。結局ピースは10,000 本以上作ったものの、並べて接着 するのに時間がかかり、使用したのは5,625 本、750mm×750mm の大きさになりました。まずこの辺で、「思ったほど面白くないかも...」という一抹の不安が脳を過ぎりました。しかし、毎日見ているから飽きただけかもしれないぞ、などと自分を励ましつつ制作 を続けました。そしてとうとう作品は完成!と思いきや、どうやってこれを展示するかを全く考えていなかったことに気づきました。自分でもびっくりです。

板状の作品なので壁作品とすることもできますが、せっかくの立体なので床に置きたいとか、同じ長さのピースをずらして並べてあるので、裏も表も水紋のような模様があり両 方とも見せたいという欲もあります。何より想定より小さくなってしまって、こじんまり としていて見せ方がよくわかりません。悩んだ末に出した結論が、「脚をつけて自立させる」でした。苦肉の策とはいえ、今考えるとありえないくらい安直な考えであり、つまらない見せ方でした。何はともあれ、搬入締め切りギリギリに作品は完成しました。

作品の題名は「月光」。水面に映る月の光のようなイメージで考えた作品なのでそうしました。



<搬入・発表>

さまざまな妥協を経て完成した作品をのせて、有給休暇を取って上野の東京都美術館搬入口へと車を走らせ、一般受付に搬入しました。学生時代に西村先生の搬入に同行させてもらったことはあったものの、今回は一人ですし、場違いのような不安もあり、ものすごく緊張して搬入した記憶があります。何とか間に合って無事搬入できたことの安心感もあり、その後の記憶はあまりありません。

入落発表の結果は、落選。アイデアの段階では自信满满だったものの、度重なる妥協と具現化した作品の出来栄えに満足していなかった自分としては、「納得」の結果でした。選外搬出で再び都美館を訪れた際、会員の方から「アイデアは面白いけど見せ方がねえ...」といった思った通りのご意見を頂戴しました。

<さいごに>

長々と初応募についての思い出を書き連ねましたが、この制作と失敗こそが、私の作品制作の源泉となっているのではないかと思います。余談となりますが、この作品「月光」は次の年額縁のようなものをつけ再構成し、「月の光」という題名で応募しましたが、結果は落選。会員の方からは前回と全く同じ「見せ方が...」というご意見を頂きました。今の自分だったらどんな見せ方をするんだろうとたまに考えますが、結局答えは見つからないままです。



伊藤 順プロフィール



- 1970 山形県生まれ
- 1998 新制作展 初出品
- 2000 上越教育大学大学院修了
- 2001 グループ展「木のかたち」展
- 2001 世界工芸コンペティション金沢 2001
- 2007 グループ展「木のかたち」展
- 2009 新制作展 新作家賞(同'11年受賞)
- 2013 新制作協会 会員推挙

現在、埼玉県久喜市立栗橋東中学校勤務
美術を担当 1学年担任